H29地域協働研究（ステージⅠ）

H29-Ⅰ-20「移動・交流体系の確立を通じた都市モデル形成と検証 －盛岡市河南地区を対象に－」

課題提案者：盛岡劇場界隈まちづくり推進会、株式会社憲PCM
研究代表者：総合政策学部　倉原宗孝
研究チーム員：佐々木栄一（盛岡劇場界隈まちづくり推進会・会長）、大石仁雄（盛岡劇場界隈まちづくり推進会）、細川智徳（株式会社 憲PCM）

＜要　旨＞

本研究では「人の移動・交流を促進する仕組み」をテーマに掲げ、コミュニティバスなど公共交通に着目した実験・検証を通じ盛岡らしい交流体系を描き出すことを目指した。実証実験では、岩手県北バス所有の「ボンネットバス」の運行を軸に盛岡中心市街地循環の特別バス運行による検証を行った。その際これまで行ってきた実験結果などとの比較検証も行った。実施日は、29年10月14日と15日の２日。それぞれ盛岡市内を５循環するという運行内容とした。結果を既存実験における参加者数と比較し、また有料運行という点も考慮しながら、今回の実験では相当の効果が創出されたとみることができる。また、沿道の様子などから乗車実績以上に人の交流を促す効果がみられた。

１　研究の概要（背景・目的等）

今日の中心市街地の現状を踏まえると、小売・サービス業の充実や観光振興、公共交通ネットワークの再構築が必要となる。その為の一つとして、本研究では高齢化、運転免許返納、バリアフリー、或いは子どもたちや若者たちにとっての足となるコミュニティバスの運行を有効手段として想定した。これによる移動・交流機能の確保の中で今日都市課題となっている空き家、既存ストック等の活用課題を実現していく狙いもある。その上で本研究では「人の移動・交流を促進する仕組み」をテーマに掲げ、特別バスの運行を軸に、人の交流ないし観光振興にどのような効果を創出できるか、ということを主体に、盛岡中心市街地循環の特別バス運行による検証を行った。

２　研究の内容（方法・経過等）

研究活動の主取り組みである実証実験として、岩手県北バス所有の「ボンネットバス」の運行を軸に、人の交流ないし観光振興にどのような効果を創出できるか、ということを主体に、盛岡中心市街地循環の特別バス運行による検証を行った。またこの実証実験を主軸に関連団体との協議、イベント企画なども検討・実践した。バス運行の実施日は、29年10月14日と15日の２日。それぞれ盛岡市内を５循環（一部の循環は、盛岡駅前を経由する変形コース）するという運行内容とした。今回はこれまで行ってきた、無料バスや、100円バスとは趣を異にし、大人300円、小人200円、１日乗り放題という料金体系とし、そのことで比較検証を行った。また運行当日は車内はもとより沿道環境の人々の観察調査を行った。

３　これまで得られた研究の成果

ボンネットバス参加者数は、10/14～118名、10/15～191名、合計309名。同時期の既往実績としては、27年10月の無料運行（２日間）における実績319名、28年10月の無料運行（１日間）での実績が64名であり、これとの比較および今回は有料運行ということを考慮すると、相当の効果が創出されたとみることができる。また、沿道から手を振ったり、写真撮影を行っている観衆も相当に見受けられるなど、乗車実績以上に人の交流を促すという意味では相当の効果があったものと認識している。

今回は、地域イベントの開催日に合わせ、いうなればイベントの「はしご」を行いながら、人の回遊度を高めるという効果を期待したものである。そのため、各イベント会場を結ぶスランプラリーも同時に取り組む中で、今回の「１日乗り放題」というメリットを活かしてもらう仕組みとした。実際に、10/14は、チケット販売枚数75枚に対して乗車人数は118名（1.57倍）、10/15は、87枚のチケット販売に対して乗車人数は191名（2.20倍）。２日合計すると、チケット１枚に対して平均1.91回乗車したという実績となっており、バス運行の沿道地域に対しては、相応の還元が出来たものと認識している。

また、今回は、昭和43年に製造され、岩手県内では２台しか現存しない、「ボンネットバス」の運行を行ったという特殊性ゆえ、ただ単に、バスに乗車した人々に関する物理的な移動手段となったことにとどまらず、このボンネットバスに乗車しない人々に対しても、以下のとおり、大きな効果を創出したと認識している。

バスを眺めたい、バスの写真を撮りたい、あるいはバスと一緒に記念写真を撮りたいという効果が確認された。これは、稀有な存在であるボンネットバスそのものに興味を持って、わざわざ見に来るという客層や、あるいはたまたま街を歩いていたら、珍しいバスが走っているということで、手を振ったり写真撮影をしたりしながら、バスを通じた交流ないしは誘客効果という点も効果として確認された。

本実験は、盛岡河南地区のほか、一部の路線は盛岡駅方面、材木町方面も周遊するコースを組んだ。これにより、企画運営においては、同地区の商店街関係者とも連携を図りながら、コース設定および事前告知等を行うことにもつながり、自然に盛岡中心市街地の主要な地域活性化団体との協調連携関係の強化にもつながった。

バスに乗車した者にとっても、地域の観光活性化を業としている者がガイドとして添乗し、沿道の名所やその由来等について、適時に解説を加えながら、街を知る、ないし新たな街の魅力を発見する、という効果も確認できた。実際に、この実験の企画運営を行った地元住民にとっても、新たに発見した、または歴史や成り立ちについてより一層深掘りできた、というような声もあるなかで、まして他地域からの来街者にとってみれば、この効果が一層大きかったものと考えられる。

４　今後の発展可能性

今回の結果を評価するに、人の交流の活発化、観光振興、さらには地域の活性化という点では、今後においても効果が期待できる。一方では、バス運行に関する費用対効果という点では、そもそも今回の運賃収入をもって20万円内外の運行経費を賄うには至っていない。将来的には定期運行までにつなげたいという構想を掲げるなかでは、可能な限り回を重ね、話題性を高め、さらには沿道の各地域からの期待度も高めながら、一層の需要を喚起していく必要がある。

今回の実証実験および既存の活動性かと合わせながら、その成果・経験を都市における建築、交通、生活の「枝」として有効に機能するかをさらに検証し、盛岡のグランドデザインを踏まえつつ、多主体に向けた移動・交流のための全体的ネットワーク再構築に向けた方向性をさらに展開、検証していく。

さらに当初想定していなかった効果として、ボンネットバスの様な個性有る移動媒体自体が盛岡の街並みや市民・観光客に与える好影響が見られたことは大きい。こうした効果について、さらに実践的な活動と普及に向かうことも課題としたい。

５　その他（参考文献・謝辞等）

本実験の企画、運営、検証においては、岩手県副知事保和衛氏（当時、岩手県秘書広報室長）、盛岡市経済企画課および景観政策課、盛岡商工会議所に支援いただきつつ、実際のバス運行経路にあたる、盛岡肴町商店街振興組合、盛岡まち並み塾（鉈屋町）、盛岡劇場界隈まちづくり推進会、盛岡駅前商店街振興組合、盛岡材木町商店街振興組合、そして、企画運営の実務に携わった、トラベル・リンク株式会社、その他関係各所にも協力いただいたこと、感謝に堪えない。

ボンネットバスのレトロな形態が盛岡の街並みには非常に似合うように感じた。今回の研究課題は移動・交流体系の確立であったが、街並みや景観の形成・育成・評価といった成果と新たな可能性・課題が生まれた。

盛岡の街に詳しいガイドによって街の情報が乗客に伝えられる。バスの内観への興味と共に乗客にとっても好評だったようだ。街学習としての効果も大きく、新しい観光のスタイルとしても今後の取り組みが期待される。

沿道には興味深くバスの通行を見守る人々の光景があった（あまりよい写真が撮れなかったが実際には市民・観光客などバスの運行を非常に興味深く見入る光景が見られた）。今後の情報発信・ＰＲ方法として今回のような取り組みの可能性がある。